

技術課課長交代

やってきたこと、やりのこしたこと。

鈴木 光一（天文台 技術推進室 副室長（前 技術課課長））

技術課長として9年6ヶ月に渡って仕事をさせて頂き2017年の9月30日で退職しました。再就職の事情で通常の定年退職日より少し早く分子研を去ることになりました。多くの関係者の皆様方のご指導、ご支援を頂きながら職責を果たすことができましたこと、お礼申し上げます。本当にありがとうございました。ここで、私のように分子研から出る者には「分子研を去るにあたり」という部分でひとこと述べるのが通常と思いますが、レターズから次のような要望がありました。技術課長の仕事で何をして何をやり残したかを振り返ってみて、それを後任に引き継ぐための企画で記事を書いて下さい、との依頼でした。ここはレターズ編集長直々のご要望ですので、その技術課長について記してみることにします。技術課は研究所の技官を組織化するために研究所創設時に設置されました。それ以降法人化のときにも技術課は技術職員の部署として存続し、現在まで続いています。そこで技術課長の仕事とは何か。これについては後半で論じるとします。



まず私の在任期間中のほとんどは大峯所長と小杉総主幹の研究所運営を裏方で支援する仕事が多くありました。これは今に始まったことではありませんが、研究所と岡崎3機関の岡崎統合事務センターとの間に入って諸々の調整を技術課長が対応することになります。また、研究所の大きなイベントには必ず登場して、時折「技術課長じゃなくて総務課長じゃないかしらん」と思うこともありました。今では語り草ですが、研究所一般公開のときに地元の警察署、消防署、東岡崎駅長、町内会長総代へ仁義を切るため、何故か技術課長が挨拶に行きます。名刺を差し出すと皆さん「？」という表情をされます。やはりこの場合、技術課長の肩書きはちょっと変でした。調整役の仕事で大きかったのは、技術課長になってすぐの2009年から2011年にかけて実験棟の耐震改修工事が行われた際の事が思い出されます。耐震構造改修と老朽化対策も含め室内改修も行うので、実験棟で展開していた研究室は所内の空いた部屋に移転してもらうことになりました。このとき移転計画を作り、移転先の部屋整備、引っ越し費用の予算組み、面積の割り振りといった調整が仕事でした。本誌レターズNo.60 からNo.63の誌面で工事の様子を小さくレポートさせてもらっています。改めて読んで見て、やはり総務課または施設課のような仕事だな、と感じます。

しかし、こういう仕事は何時か誰かがやらなければ研究所は先に進めないという気持ちで取り組んで来ましたが、ただ元々技術屋で慣れない事への対応ですからテキパキとは行きません。こういうときに経験のある人物と一緒にいたらと思うことは何度もありました。その点で、2017年度4月からURAで来て頂いた福井さんは心強い存在です。退職間近のことでしたが、2017年9月15日に「分子科学研究所職員等功労表彰要項」という規程ができています。表彰するというのは、職員が研究所に業務で貢献した際にそれに報いる手立ての1つです。そんなもんは要らないという人もいるでしょうけど、表彰状でも授与して頂いた方が次への励みになるという人もいます。実際に表彰して欲しいという意見を頂いたときに、是非実現しようと思いました。調整役としては所長の理解を得てスタートをかける所までは何とかできましたが、その先の実務はあれやこれやと時間がかかりそうでした。このときに総務部長を歴任された福井さんが力を発揮してくれて、岡崎統合事務センターの方々をリードして、今年（2017年）の7月頃企画して9月中旬には規則が出来上がりました。9月末には退職でしたから在職中には無理かなと思っていたのですが間に合っていました。あとはどう運用するかを考えるだけです。これくらいのスピード感は当たり前と言われそうですが、今まではなかなか出来なかったことです。

さて、話を少し戻して技術課長の仕事と、やり残した事について触れてみます。先にも記述しましたが、分子研創設時に技術課は設置され、そこには「技術」を集めてではなく技術者（人材）を組織して研究を支え、研究を促進すること、さらに技術職員の個の力だけではなく、それが集まった全体として研究所の中で力を発揮する存在であること、が理念としてあると思います。従って技術課長は人材としての技術職員の一人一人を見つ、全体としての技術課が研究所に貢献できる事を考え推進するのが任務じゃないでしょうか。そのためには、技術職員の個々の技術力向上や資質向上を目指して時間をかけて取り組み、最終的に研究所にとって役立つ人材を育成することが大きな仕事の一つだと思います。個々の技術力と言うときに、よく分子研から外に出ても通用するような技術力を備えた人材となるようにと表現されます。それを早く実現するには、外に出て実績を積み上げてくるのがひとつの方法ですが、技術職員はほとんど外部への異動の機会はなく、どうしても研究所の中で学んでいく必要があります。従って分子研の中である程度完結するキャリア形成を考えることが必要です。しかし自分もそうでしたが、技術職員は「全体を見て」というのがなかなか出来ません。自身のキャリアを考えると、分子研で年月かけて積み上げた技術力と経験値を先々生かして行きたいと思うのは当然です。ですが技術も常に進みますし研究所も時代と共にどんどん変化し、技術職員の仕事を取り巻く環境が変わります。そういう状況は、技術課長は立場上よく見えるので、個々の技術職員が考える際に全体のことも考えながら一緒に、じっくり対応するのが役目でしょう。

分子研が必要とするキャリアと技術職員自身の価値観で描くキャリアの両方はそれぞれ重要で、それらを合わせつつ技術職員をマネジメントするのが技術課長の仕事です。さてしかし、これが出来ていたかと言えば十分に出来ていません、やり残した一番大きなこととなります。後任の繁政技術課長にはこのやり残しを引き継いで頂きたいと切に願う次第です。技術課長は現在では研究所の中では技術課業務の他に何でも対応するという重要な役目があり大変ですが、このやり残した仕事も福井さんというエンジンが付いていますので、おそらく大丈夫と期待しています。



技術課長を拝命して

繁政 英治（技術課 課長）

UVSORの助教授・准教授として17年。チームライン建設や実験装置の開発とそれらを活かした共同研究の推進に加えて、私自身初めての総研大生1名を研究室に迎え、研究と教育にそれなりに充実した日々を過ごしていた2016年夏。突然一本の内線電話が川合所長から掛かってきました。所長室にて突

然切り出された話題は、技術課長への就任の可能性についてでした。分子研に着任して10年くらい経った頃から、放射光業界では最も魅力のあるUVSOR准教授ポストを後輩に早く譲らなければとのプレッシャーを感じ続けていた私は、心中穏やかではいられませんでした。自分に務まるのかという大きな不安。熟慮の後、頼られているうちが華かなと思い始め、お引き受けすることにしました。どうせやるからには、何事にもスピード感を持って全力投球しようとの決意を新たにしました。

鈴井さんも書かれていますが、分子研の技術課長には、技術職員のトップという役割のみならず、総務課長や施設課長のような調整系の役割が求められています。技術課長を拝命する事を決断してから、鈴井さんのお仕事ぶりがとても気になり、注意深く観察させていただいておりました。中でも、いわゆる平成30年雇用問題と呼ばれる労働契約法の改正に伴う人事制度に関する案件は、関係者全員の面談の実施に至るなど、とても大変そうでした。この案件については、流石に素人だけで乗り切るのは困難との執行部のご判断により、福井さんをお迎えすることになったと理解しています。従来技術課長が行っていた仕事の内、管理運営事務の部分の福井さんにご担当いただけるのは本当に心強いことです。

2017年4月より、鈴井さんを含めた三人での仕事が始まりました。その殆どが、研究力強化戦略室に関係したものでした。お二人のお仕事ぶりには毎日感心させられることが多く、特に、分子研を、研究者を、全力で支えることが自分達の使命であるとの強い信念は、これまでの自分に最も欠けている部分だと痛感した次第です。長い時間の中で染みついた感覚ですから、一朝一夕に変えることは困難だと思いますが、日々の業務の中で、事ある毎に意識付けて行こうと思います。

技術課長の仕事については、鈴井さんから引き継いだ課題を手際よく解決する術は生憎持ち合わせておりません。どんなに優れた技術を習得していても、常に自己研鑽を続け、最先端に触れ続けていなければ、陳腐化することは避けられません。加えて、分子研内の組織や技術職員に求められる仕事の内容も、特に法人化後以降、大きく変わっています。所内外の研究者に対する技術的な支援業務は元より、ネットワークの管理運用や広報活動、安全衛生管理や施設整備に関連する業務に至るまで、分子研の技術職員の担当業務内容は、非常に多岐に亘っています。鈴井さんと福井さんと仕事で一緒にするようになってから、技術課に関する簡単には解決出来ない課題ばかり脳裏を過ぎるようになりました。多くの研究者に感謝して貰える充実した仕事ができる組織や職場環境を如何に整備するのか？平均年齢が上がる中で、優秀な若い人材をどのように確保し、どのように育てて行くべきか？等々。難しい課題を挙げれば切りがありません。とは言え、先ずは行動することから始めるのが私の信条ですので、出来そうなことから福井さんを巻き込んで行動を起しているところです。行政職として研究者を支援する立場の技術職員の使命感に加えて、研究者としての矜持を持って、研究職、事務職、及び技術職の意思疎通を図りながら、研究所を前に進めていく一助になれば幸いです。

「URA 職員」として目指すところ

福井 豊（研究力強化戦略室 室長補佐）

岡崎に14年ぶりに戻ってきて、分子研の特任専門員及びURA職員として、研究力強化戦略室（以下「戦略室」という。）に配属されました。戦略室の仕事は主として、①国際的先端研究の推進支援、②国内の共同利用・共同研究の推進支援、③国内外への情報発信・広報力強化、④研究者支援（若手・女性・外国人等）、⑤評価・企画として研究マネジメント体制の構築、に分類されます。私の役割は、室長（岡本総主幹）を補佐しつつ、⑤の企画部分になります。



着任時に所長からいただいたご指示は、「研究者になるべく事務の仕事させないように」であり、その理念のもと、当面は主として契約職員（事務支援員及び技術支援員）と特任専門員の定年制移行職員への移行事務を行ってまいりました。本事務については、前年度から既に飯野教授と鈴井前技術課長が中心となって、ヒアリングなど進めてくださっていたので、私が行ったことは、①監督者からの定年制移行申出書の取りまとめ、②面談の準備及び実施、③定年制移行者の決定、④定年制移行者向けの労働条件通知書発布への資料の新規作成、及びこれらに付随する事務作業となります。これらのことを比較的スムーズに行えたのは、所長はじめ研究所の職員や事務センター職員のご協力のお陰です。多くの関係者の皆様に心より感謝しているところです。

自分の仕事を遂行するにあたり、もう一つ考慮しなければならないのは、URA職員という身分付与もされているところです。URAというと、第一義的には、研究者を支える者ということですが、それにはやはりある程度研究のことが理解できる必要があります。科研費を初めとする競争的資金に関する情報提供や申請支援等を行ったり、共同利用で来所される研究者が円滑に研究を進め、力を発揮できる環境を整備したりすることも含まれると思います。研究経験の無い私の立ち位置は、研究者の直接支援ではなく、事務を通じた支援という形にならざるを得ないので、前文では後者に該当する

と考えています。

研究所には事務職員がいないので、技術課長が今までされてきた管理運営事務的なところを手始めとして、規程、規則、要項等の企画・立案、あるいは人件費の試算、概算要求（施設整備）支援等の部分で研究所に貢献したいと思っています。また、研究大学コンソーシアムの資料を見ますと、研究大学においては、URAのキャリアパス整備が進められているようですので、自分が実績をあげることによって、所長や総主幹はじめ主幹クラスの多くの先生方に、私のポストが必要不可欠と判断していただき、それが恒久化されることを切望すると共に、こうした制度を確立することが、後輩たちの仕事に向き合うモチベーションの礎となることを固く信じているところです。

鈴井課長 感謝の会が盛大に開催されました

中庭の木々の葉も色づき、風に舞う落ち葉に秋の深まりを感じる2017年11月14日（火）夕刻、岡崎コンファレンスセンター中会議室に於いて、9月30日をもってご退職なされた鈴井光一前技術課長の退職記念感謝の会が盛大に開催されました。

鈴井前技術課長は、分子科学研究所の設立と同時に設置された、国内では初めての教室系技官組織である技術課の最初の技官として、1976年4月に入所されました。装置開発室の機械工作の担当として、初代技術課長を務められた故高橋重敏氏の薫陶を受け、名古屋大学理学部装置開発室にも出向いて知識を深め、技術の研鑽に努められたそうです。そうして腕を磨かれた結果、最先端の分子科学の研究に必要な実験装置の開発のみならず、日常のちょっとした実験を行う上で不可欠となる機器や部品の設計・製作でも多くの功績を残されたことは皆様ご存知のことと思います。2008年4月からは、技術課長に就任され、法人化2期目以後の分子科学研究所の発展のために多大なご尽力をいただきました。お人柄も含めて、鈴井前技術課長のご貢献とご指導抜きには今日の分子研技術課を語ることはできません。

ご退職日が迫る中、慣例となっている退職記念パーティーの開催を著者から鈴井前技術課長に打診してみたものの、そのような会の開催を頑なに固辞されてしまいました。特に、退職記念パーティーに付き物の記念品代の徴収には断固として反対されました。その背景には、鈴井前技術課長が、その立場上、殆ど面識のない退職者にも記念品代を支払ってきたという体験を他の人にして欲しくないとお考えがありました。とは言え、やはりちゃんと区切りを付けるべきであるとお考えをお持ちの川合所長と岡本研究総主幹、お二人によりご説得いただいた結果、鈴井前技術課長の長年のご苦勞をねぎらい、感謝の気持ちをこめたささやかな手作りのパーティー、「感謝の会」を開催する運びとなりました。

感謝の会の準備は、技術課の班長を中心に進められました。限られた予算の中で、参加した人達の満足度の高い、手作り感満載の宴会にするにはどうすれば良いのか。お酒類の寄附を募り、おでんとたこ焼きを装置開発室とUVSORで分担することは直ぐに決まりましたが、何と言っても前例のない宴会です。受付や広報、戦略室のメンバーも巻き込んで、皆でアイデアを出し合い準備を進めました。そんなある日、所長が紫綬褒章を受章されることになり、その伝達式と拜謁が、なんと感謝の会と同じ日になってしまったのです。そこで、当日参加することが適わない方々に、ビデオレターを送っていただくことにしました。所長のビデオレターは著者が撮影したのですが、演出は所長が自らなされました。その演出が、今回の感謝の会の流れを創り出す源となりました。準備の打合せで次々と出て来るアイデアを実現するために、ネットで衣装を注文したり、100円ショップに走ったり、大型プリンターでの出力や、風船や折り紙など、まるで毎放課後学園祭の準備をするような日々が開催の直前まで続きました。

当日、会場の入口では、何故か大きな蝶ネクタイやメガネにリボンなどが参加者に配られました。通常の分子研の宴会とは趣が異なる演出の中、照明が落ち、主賓と司会者（筆者）が髭ダンスのテーマに乗って入場、その後の開会宣言に引

き続き、これも異例となる参加者全員の集合写真を歓談の前に撮影しました。開会のご挨拶と乾杯のご発声は、大きな蝶ネクタイ姿の岡本研究総主幹と山本装置開発室長にそれぞれお願いしました。お二人の普段とは違うお姿と心温まるスピーチに、唯でさえ和やかな会場の雰囲気は更に和んだ印象でした。

しばらくの歓談の後、ビデオレターが上映されました。名古屋大学の篠原久典先生、東北大学の美齋津文典先生、東京工業大学の藤井正明先生から、それぞれの先生方が分子研に在籍中の鈴井前課長との関わりや装置開発に関するエピソードについてご紹介いただきました。続いて放映された北陸先端科学技術大学院大学・技術サービス部の但馬陽一主任技術職員が編集されたビデオレターは、村上達也主任技術職員と宇野宗則技術専門職員からの鈴井前課長との出会いや感謝とねぎらいの言葉に続き、東嶺孝一技術専門職員とマテリアルサイエンス系の赤堀誠志准教授からのメッセージ、更には装置開発室の助教授として鈴井前課長と苦楽を共にされた三谷忠興北陸先端大名誉教授のビデオメッセージ、最後はドローンの空撮による工作室の風景で締め括られるという大作でした。ビデオレターの後半部分では、分子研に在籍された多くの先生方から鈴井前課長にメッセージや差し入れがあったことを報告させていただくと共に、出落ち感満載のトランプ大統領の覆面を被った内山係長の鈴井前課長への感謝の言葉で締めとなりました。鈴井前課長の機械工作に関する高い技術力のみならず、そのお人柄に魅了された関係者が多く存在したことを、ビデオレターから窺い知ることが出来ました。

宴も酣となる中、軽快なウクレレサウンドと共に魚住先生が前に進まれ、「あ～ ああんあ、やんなっちゃった、あ～ あああおどろいた♪」、40代以上には懐かしいフレーズ。そう、魚住先生のウクレレ漫談の始まりです。プロ顔負けの腕前で、鈴井前課長にまつわる話を面白おかしく演奏され、会場は大いに盛り上がりました。

宴会の終盤、感謝の会をご欠席なさった川合所長のビデオレターが披露されました。所長から鈴井前課長への感謝のお気持ちとユーモア溢れる演出に、会場内は笑いの渦に包まれました。引き続き、記念品の贈呈へとビデオ映像が進みます。

メイドの衣装を纏った3人（永園特任専門員、林係長、及び手島主任）のプレゼンターによる小芝居を経て、スポットライトを浴びながら、007のテーマ曲に乗ってよいよ本命のプレゼンターの登場です。渡哲也ばりの福井研究力強化戦略室長補佐とバニーガール姿の原田係長から記念品としてピール半年分が贈呈されました。満面の笑みで、特大のピールの看板を手にした鈴井前課長のご挨拶の後、参加者からの感謝の気持ちを込めた万雷の拍手を浴びながら、鈴井前課長が会場を後にされ、感謝の会は閉会となりました。鈴井前課長の人徳により生み出された参加者の一体感。その流れそのままに、参加された殆どの方が会場の撤収作業を手伝って下さり、あっという間に元のレイアウトに戻ったことは、とても印象深い出来事でした。当日の参加者約80名の皆様のご協力により、鈴井前課長の感謝の会は盛会に終わりました。世話人一同、心より御礼申し上げます。

（繁政 英治 記）

